収穫感謝礼拝説教（2019 年 11 月 24 日）

説教者：中村信哉

感謝して受けるとき

テモテへの手紙 4 章 1-5 節

はじめに

今日は、収穫感謝礼拝です。私たちクリスチャンは、いつでも神様に感謝することが求められていますが、私たちの教会では年に一度、このように特別に神様に感謝をささげる礼拝を設けています。日本長老教会の「礼拝指針」においても、**「感謝の日を神の摂理と導きによって守ることは、聖書的であり、理性にもかなっている」**とあり、特別に「感謝の日」をもうけることを勧めています。

今日は、聖書から「感謝すること」の大切さについて学びたいと思います。

1. 結婚することを禁じたり、食物を断つことを命じたりする者たち

テモテへの手紙第一は、使徒パウロが若い牧師であるテモテに宛てた手紙です。1 節には、**「御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります」**とあります。「後の時代」、つまりパウロたちの後の時代には、ある人たちは信仰から離れるようになると言われています。

なぜそういうことが起こるのでしょうか。それは、「惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われる」からです。では、「惑わす霊と悪霊の教え」というのは、どんな教えでしょうか？

それは、**「結婚することを禁じたり、食物を断つことを命じたり」**する教えです。これは、「グノーシス主義」という異端の教えだと言われます。グノーシス主義は、ギリシヤ哲学の影響を受けた異端です。彼らは、肉体や物質を「悪いもの」と考え、精神や霊を「良いもの」と考えます。彼らは、肉体や物質という「悪いもの」から解放されることこそ「救い」であると考えます。そして精神的なことや霊的なことだけを深めることこそ、人間にとって「良い生き方」だと考えます。

このグノーシス主義がなぜ異端と呼ばれるのかは、彼らが、神様が人間となられたイエス様を否定するからです。彼らにとって肉体や物質は「悪いもの」です。ですから聖なる神様が肉体のような「悪いもの」をまとうはずがないと考えるのです。彼らは、イエス様こそ、真の神様であり、真の人間であることを否定するのです。

彼らにとって肉体的なものは「悪いもの」なのです。ですから、性的なこと、つまり性欲も「悪いもの」と考えます。その結果、彼らは結婚することも禁じるようになるのです。また彼らにとって物質的なことも「悪いもの」なのです。食欲も「悪いもの」と考えます。その結果、食物を断つことを命じるようになるのです。彼らは、性欲や食欲を断つ禁欲主義の生き方こそ、「良い生き方」だと考えるのです。

パウロたちの「後の時代」の教会は、このようなグノーシス主義に惑わされて、信仰から離れるよう人たちが出てきたのです。しかしこのグノーシス主義的な考えは、現代の教会にも影響を与え続けています。現代の教会でも、精神的なことや霊的なことばかりが大切にされて、肉体的なことや物質的なことが疎かになる傾向があります。そして禁欲主義に傾く傾向があります。私たちの教会も属する「福音派」と呼ばれるグループは、特にそのような傾向があると言われます。例えば、教会の中では、性的なことがタブー視されたり、お酒を飲むことが一切禁止されたりすることに表れているように思います。

2. 神が造られたものはすべて良いもの

パウロは３節以下でこのように言っています。**「しかし食物は、信仰があり、真理を知っている人々が感謝して受けるように、神が造られたものです。神が造られたものはすべて良いもので、感謝して受けるとき、捨てるべきものは何もありません。神のことばと祈りによって、聖なるものとされるからです」**。

パウロはまず、食物は神様が造られたものだと教えています。これは、結婚にも言えることです。創世記 1-2 章には、神様が人間を男性と女性に造られ、彼らを祝福して**「生めよ。増えよ。地に満ちよ」(創世記 1:28)**と言われ、ふたりは一体となるとあります（創世記 ２：24）。ここには、結婚は神様によって造られた制度であり、性的な行為も祝福であると言われています。

またパウロは、神様が造られたものはすべて良いものだと教えています。神様は六日間で創造の業を終えられた時、ご自分が造ったすべてのものを見られて、**「見よ、それは非常に良かった」(創世記 1:31)**と言われました。その意味では、食物も結婚も性的な行為も、本来は良いものとして造られたということが分かります。

しかし、アダムとエバが神様の命令に背いて禁断の木の実を食べた時から、神様と人間の関係は壊れ、私たち人間は罪の性質をもって生まれてくるようになりました。その結果、私たち人間は、食欲も性欲もうまくコントロールできなくなりました。その結果、体を壊したり、家庭を壊したりするようになりました。

例えば、お酒も本来は良いものとして造られたはずです。イエス様は、**「外から人に入って来るどんなものも、人を汚すことはできません」(マルコ 7:19)**と言われ、すべての食物をきよいとされました（マルコ７：19）。またパウロも**「すべての食物はきよいのです」(ローマ 14:20)**と言いました。イエス様は、水をぶどう酒に変えたことがありますし（ヨハネ２：1-11）、聖餐式の制定の時にぶどう酒を用いられました。もしお酒が「悪いもの」であったら、イエス様は水をぶどう酒に変えることも、聖餐式にぶどう酒を用いることもしなかったでしょう。またパウロはテモテに、胃のために、また病気のために、少量のぶどう酒を用いることを勧めています（Ⅰテモテ５：23）。アルコールは現代でも、消毒のために用いられたり、料理のために料理酒として用いられることもあります。

これらのことから分かるように、お酒自体が悪いものなのではなく、お酒を用いる私たち人間が罪の性質を持っているため、お酒を正しく用いることができなくなって、あらゆる罪を引き起こしてしまうのです。そのため聖書は、お酒の危険性を度々警告しています。お酒で人生を狂わされた多くの人がいます。それは、お酒自体が「悪いもの」なのではなく、お酒を用いる私たち人間の罪の性質が「悪い」のです。

性的な行為も同じです。性欲や性的な行為も本来は良いものとして造られたはずです。人間に罪の性質が入る前から、神様は「生めよ。増えよ。地に満ちよ」と言われたのですから。しかし人間に罪の性質が入った時から、人間は性欲や性的な行為をコントロールできなくなり、あらゆる罪を引き起こすようになりました。そして家庭を壊すようになったのです。この性の乱れから人生を狂わされた多くの人もいます。

3. 感謝して受けるとき、捨てるべきものは何もありません

では私たちクリスチャンは、どうすればよいのでしょうか。お酒や性的な行為も危険性が強いので、それらを避けて禁欲主義になればよいのでしょうか？もちろん、それらが人をつまずかせる場合は、避けることも愛であり、一つの知恵でしょう。パウロはそのように勧めることもあります。しかしパウロは今日の聖書箇所で、神様が造られたものは本来よいものなのだから、神様に感謝して受ける時には、何一つ捨てるべきものはないとも言います。それは、お酒も性的な行為も、でしょう。それらは、決して切り捨てるべきものではないと言います。それらを、神様が造られたものとして、神様に感謝して、神様の秩序に従って受け取るなら、それらは決して「悪いもの」ではなく「聖なるもの」とされると言うのです。

私たちは決して、神様が造られた本来「良いもの」を、まるで「悪いもの」であるかのように切り捨ててはならないのです。まるで肉体そのものや物質そのものが「悪いもの」であるかのように考えたり、お酒そのものや性的な行為そのものが悪いものであるかのように考えて切り捨ててはならないのです。

私たちクリスチャンは、イエス様を信じて神様と和解し、神様との交わりを回復したものです。そして新しく造られたものです。新しく造られた私たちは、神様が造られたすべてのものを「新しい目」で見ていくようになるのです。すべてを神様が造られたものとして見て、すべてを神様から与えられたものとして感謝して受け取るようになるのです。

私たちが感謝して受け取る時、神様が造られたすべてのものが「聖なるもの」とされるのです。パウロは、**「あなたがたは、食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい」（Ⅰコリント 10:31）**と言いました。私たちは、何かを食べる時も、何かを飲む時にも、神様に感謝して受け取るなら、そのことを通して神様の栄光を現すことができるのです。

またパウロは、**「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことにおいて感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです」（Ⅰテサロニケ 5:16-18）**。私たちが感謝の祈りをもって、また喜びをもって、神様が造られたものを受け取るなら、それらはすべて「聖なるもの」とされるのです。

おわりに

神様が造られたものはすべて、本来は「良いもの」で、神様に感謝して受け取るならば、捨てるべきものは何一つありません。私たち人間も神様に造られたものです。私たち人間も、神様のかたちとして、本来は「良いもの」として造られました。しかし、罪の性質を持った時から、神様の御心を悲しませ、怒りと裁きを積み上げ、多くの隣人を悲しませ、傷つけるようになりました。

私たちは、自分自身をも神様に造られたものとして、感謝しなければなりません。もし私たちが、イエス様を信じて「新しい目」を与えられ、自分自身を神様に造られた「良いもの」として、感謝して生きるなら、私たちは「聖なるもの」とされるのです。私たちは、自分のことを、必要以上に卑下したりしてはいけません。

また私たちは、隣人をも神様に造られたものとして、感謝して受け入れなければなりません。もし私たちが、「新しい目」で隣人を見て、神様のかたちに造られた「良いもの」として、感謝するなら、切り捨てるべき人は一人もいないのです。

私たちは自分自身の存在を、また隣人の存在を感謝していくことを通して、神様の栄光を現すことができるのです。私たちは、神様が造られたあらゆるものを、御言葉の光に照らして見ることを通して、また神様への感謝の祈りをもって受け取ることを通して、あらゆるものを「聖なるもの」としていくことができるのです。感謝には、そのような力があるのです。

最後に、小坂忠さんという方が書いた詩を読んで終わります。

目に映るものすべてが今までとは違う　歩き慣れたこの通りでさえ
ビルの谷間を行き交う見知らぬ顔も　とても親しい人のようだ
すべてが美しい　今までとは違う　すべてが美しい　今までとは違う
愛を知ってから　イエスに出会ってから　この心が変わってから

私たちクリスチャンは、新しく造られた者として、新しい目で世界と隣人を見て、神様に感謝をささげ、あらゆるものを「聖なるもの」としていくことが求められているのです。

天におられる私たちの父である主なる神様。

天にあるものも、地にあるものも、すべてはあなたが「良いもの」として造られたものです。しかし私たちの罪の性質によって、「良いもの」を汚し、まるで「悪いもの」であるかのようにしてしまいました。どうか、私たちを新しくしてくださって、私たちの新しい目を磨いてくださって、すべてのものを神様が造られたものとして見て、感謝して受け取っていくことができますように。そしてあらゆるものを「聖なるもの」としていくことができますように。自分自身を、隣人を、日々与えられているものを、感謝して受け取り、あなたがご栄光を現していくことができますように。この祈りを、イエス様のお名前によってお祈りします。